



〈雑録〉獨逸ニ於ケル電氣事業及其企業法

上田, 貞次郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 7(3):393-404

(Issue Date)

1909-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051442>



獨逸ニ於ケル電氣事業

及其企業法

商學士 上田貞次郎

獨逸ニ於ケル電氣事業ハ種々ノ點ヨリ觀テ吾人ノ恰好ナル研究題目タルヲ疑ハズ。電氣應用ノ技術ガ近世科學上ノ偉大ナル新發明タルコト其ナリ。電氣ノ應用ガ近世工業界ノ需要ヲ充スコト大ナルノ結果トシテ僅カ二十年間ニ經濟上空前ノ大發達ヲ遂ゲタルコト其ニナリ。我日本ノ國土ガ急流ニ富ム結果トシテ將來此水力ヲ利用シテ大ニ電氣事業ヲ興スニ至ルベキコト其三ナリ。然リ而シテ余ガ此ニ特ニ獨逸ノ電氣事業ニ就テノ觀察ヲ叙セントスル理由ハ獨逸ニ於ケル該事業ガ一種獨特ノ企業法ヲ發展セシメタルコト是ナリ。最近獨逸ノ經濟學界ニ雷名ヲ轟シツ、アルウエルテル、ゾムバルトハ其名著「第十九世紀ノ獨逸國民經濟」ノ中ニ、簡單ニ斯業

ノ發達ヲ説明シテ曰ク「我獨逸ニ於テ過グル二十年間ニ經濟界ノ最大事業ノ一トナリ、ソノ發達ノ急速ナリシト其組織ノ特殊ナルトニ依テ資本制ノ歴史ニ一新紀元ヲ開クモノハ實ニ電氣工業ナリ」ト。同氏又曰ク「人モシ第二十世紀ニ於ケル資本制ヲ現實ニ理解セント欲セバ余ハ獨逸ノ大銀行及之ト密接ノ關係ヲ有スル所ノ大電氣會社ノ事情ヲ研究センコトヲ薦ムルノ外ナシ」ト。而シテ本論ノ趣意ハ即チ此ゾムバルト氏ノ薦ムル所ニ從テ獨逸ノ電氣事業特ニ其特殊ナル企業法ヲ概觀シテ以テ近世企業全般ノ研究ニ資セントスルナリ。尙本論起草ノ際特ニ參照セシ書物左ノ如シ。

Krelier, Die Entwicklung der deutschen Elektrotechnischen Industrie. Leipzig. 1903.
Fasolt, Die sieben grössten deutschen Elektrizitäts-Gesellschaften. Dresden. 1904.
Koch, Die Konzentrationsbewegung in der deu-

tschen Elektroindustrie. München. 1907.
Hasse, Die Allgemeine Elektrizitäts-Gesellschaft. Heidelberg. 1902.

一 電氣ニ關スル技術上ノ

進歩ト其企業法

純正科學上ニ於ケル電氣ノ研究ハ措テ問ハズ電氣ガ工業上ニ應用サル、ニ至リタルハ實ニ新シキ事實ナリ。米人サミュエル、モールスガ始メテワシントン、ボストン二市ノ間ニ電信ヲ通ジタルハ一八四四年ノ事ナリ。獨逸ノ砲兵士官ウエルテル、ジーマENS (Werner Siemens) 即チ今ノジーマENSハルスケ會社(Siemens u. Halske)ノ創立者ガ絶縁サレタル電信線ヲ廉價ニ製造スル方法ヲ發明シタルハ其翌々年ノ事ナリ。電氣機械ノ製造業ハ此時電信材料ノ供給ノ爲メニ始メテ起リタルナリ。然ルニ爾來電信ノ便利ハ各國民ノ廣ク認ムル所トナリ、電信布設事業

ハ水ノ堤ヲ決スルガ如キ勢ヲ以テ忽チニシテ文明諸國ノ山野ニ普及スルニ至レリ。プロイセン王國ノミニ就テイフモ一八五〇年ニハ電線延長四千基米、電信局數四十ヶ所ヲ算シ一八六六年ニハ電線延長五千基米、電信局數千二百ヶ所ヲ算スルノ盛況ヲ呈シタリ。一八六〇年代ノ終ニ當リテジーマENS氏ハ倫敦ヨリエムデンヲ經由シプロイセン、ロシア、ペルシアノ三國ヲ橫リテ印度ノカルカッタニ達スル電信敷設ノ大工事ヲ請負フニ至レリ。此等ノ大規模ナル工事ニ使用サル、所ノ電線及電信局内ノ各種備品ノ數量ハ頗ル多額ニ登ラザルヲ得ズ。其多額ナル材料ヲ供給スル所ノ電氣製造業ハ二十餘年間ニ發生シタルモノナリ。當時此事業ヲ殆ド獨占シタルジーマENS氏ノ工場ハ一八四七年ニ僅カニ十人ノ職工ヲ使用セシガ二十五年ノ後ニ至リテ職工事務員ヲ併セテ二千乃至三千ノ使用人ヲ有シタリ。是非常ノ進歩ナリトイフベシ。然レドモ此

ニ注意スベキハ此ノ如キ多數ノ使用人ヲ有シタル當時ノ電氣製造業ガ未ダ全ク近世式大工業ノ體裁ヲ具フルニ至ラザリシコトナリ。蓋シ元來電氣機械ノ製造ハ精巧ナル機械職工ノ手工ヲ要スル所ノ仕事ニシテ大組織ノ裡ニ完全ナル分業ナルヲ營ムニハ適當セザリシナリ。換言スレバ一ノ企業ノ下ニ多數ノ職工ヲ使用スレドモ職工間ニ微細ナル分業ヲ行フコトナク、各職工互ニ獨立シテ個人的ニ仕事ヲ遂行セルナリ。ゾムバルトノ用語法ニ所謂「大規模ノ個人經營」(Individual betrieb im Grossen)ナリ。然リ而シテ此ノ

如ク分業ヲ充分ニ行ハザル所ノ經營法ハ生産費ノ節約ニ於テ多ク手工業ニ及バザルベキハ理ノ見易キ所ナルニ實際ニ於テジήμεンスガ此工業ヲ獨占シ得タル理由ハ外ニアリ。其理由ノ一ハ電信事業ガ本來大規模ノ事業ナルニ依リテ注文ノ常ニ大口ナルコト是ナリ。又他ノ一ノ理由ハ電信機械ノ製造ニ關スル技術ガ當時全然新奇ニ

シテ容易ニ門外漢ノ習得ヲ許サバリシコト是ナリ。此第二ノ理由ハ凡テノ電氣業ノ集中的傾向ニ大ナル刺戟ヲ與フルモノニシテ今日ニ至ルマデ其勢力ヲ失ハズ。特ニ專賣特許ノ制度ハ人爲ヲ以テ外部ヨリ此ノ集中的獨占的傾向ヲ保護シツ、アルナリ。又第一ノ理由即チ販路ノ大ナルガ爲メニ之ニ對スル生産業ヲモ大規模ニ導クノ事實ハ是亦類例ニ乏シカラザルコトナリ。之ヲ要スルニ一八七〇年頃迄ノ電氣製造業ハ經濟ノ大規模ナルコト、技術ノ小規模ナルコト、併立スルヲ以テ其特色トナスヲ得ベシ。

然レドモ一八七〇年以前ハ電氣製造業ノ歴史ニ取リテハ比較緊要ナラザル第一期ナリ。研究上一層大ナル注意ヲ要スル所ノ第二期ハ一八七〇年以後ニアリ。蓋シ抑電氣ノ技術ニハ高壓ト低壓トノ二種アリ。低壓ハ電信電話及鐵道信號ニ應用セラレ、高壓ハ電燈及電動力ニ應用セラル。現今電動力ハ電車電氣「クレーン」諸工場ノ

動力等其用途極メテ廣シ。高壓電氣ヲ起スニハ「ダイナモ」ヲ要ス。而シテ此「ダイナモ」ハ實ニ一八七〇年頃ジトメンスノ發明セシモノナリ。故ニ第一期ハ低壓電氣ノ時代、第二期ハ高壓電氣ノ時代トイフコトヲ得ベシ。

高壓電氣ノ最初ニ應用サレタルハ電燈ナリ。電動力ハ遅レテ研究セラレ一八九〇年以後ニ始メテ實際問題トナリシガ、電動力ノ用途ハ非常ニ廣キガ故ニ忽チニシテ電燈以上ニ多量ノ材料ヲ需要スルコトナリ。又之ヲ全體ニ就テ見ルニ高壓電氣ノ實用ハ一八八〇年代以後特ニ同九〇年以後ニ莫大ナル發展ヲ遂ゲ電氣製造業ノ繁盛ヲ誘致シタルモノナリ。一八九八年頃ニ於ケル高壓材料ト低壓材料トノ生産高ヲ價額ニ付テ比較スレバ九二對八ノ比ヲナセリ。故ニ電氣製造業ノ第一期ハ今日ヨリ見レバ實ニ微々タルモノニシテ概言スレバ電氣製造業ハ過去二十年間ニ成レリトシテ可ナリ。

一八八〇年代ニ於テ電氣製造業ノ企業法ニモ亦大變化ヲ來シタリ。第一期ニ於ケル此事業ノ組織ハ前ニ述ベタル如ク半ハ手工業的ナリシガ此時ニ至リテ分業ヲ行ヒ、種々ノ機械ヲ使用スルニ至レリ。勿論此變化ハ幾多ノ有爲ナル支配人及技師ノ苦心工案ニ依テ次第ニ遂行セラレシモノニテ最初ハ「ダイナモ」ノ製造、次デ一般高壓材料、尙其後ニ低壓材料ニ及ンデ終ニ全體ヲ組織的結晶的ナル大工業トナシ、益大資本ノ適用、大規模ノ經營ニ適セシメタルナリ。

第二期ニ入りテ電氣製造業ノ製品ハ頗ル多種多樣ニナリタレバ一方ニハ大資本ヲ投ジテ此多種類ヲ包括セントスル大會社ヲ生ズルト共ニ他方ニハ其内ノ一二種ヲ專業トシテ製造セントスル専門工場ノ勃興ヲ見タリ。電氣「メートル」電話器、電燈、絕緣裝置、其他千種萬樣ナル附屬品、半製品、ノ如キハ此等専門工場ノ得意トスル所、之ニ反シテ「ダイナモ」、電車、電信、電話ノ

請負ノ如キハ包括的大會社ノ獨占スル所ナリ。
然レドモ概シタイヘバ專門工場ノ製品ハ其ノミ
ニテ顧客ノ需要ヲ充スコト能ハザルガ故ニ其製
品ヲ直接ニ顧客ニ賣ラズシテ包括的大會社ノ下
請ヲナスヲ常トス。此事情ハ彼ノ專賣特許ノ制
度ト相俟テ電氣製造業ニ集中の特色ヲ付與シタ
ルコト明カナリ。蓋シ電氣ノ應用ハ新技術ニシ
テ此方面ニ新工夫ヲ廻シ、新發明ヲナス人ハ甚
ダ少數ニ限ラレ、例ヘバ米國ノエヂソン氏獨逸
ノシーメンス氏ノ如キハ自己ノ發明ト其部下ノ
發明トヲ併セテ數十百種ノ專賣權ヲ有スルガ故
ニ自然斯業ノ獨占者トナルベキ勢力ヲ得ルナリ

二 一般事業界ノ消長ト

電氣事業企業法

獨逸ニ於ケル電氣製造業ノ第一期第二期ハ共
ニウエル子ル、シーメンス獨占ノ時代ナリ。新
紀元ヲ開キタル電線製造法竝ニ「ダイナモ」ハ

シーメンス氏ノ發明シテ自ラ製造發賣シタルモ
ノナリキ。然ルニ一八八五年頃ヨリ同國ノ電氣
製造業ハ更ニ一ノ大變動ヲ來セリ。此變動ハ技
術的方面ヨリ來ラズシテ商業的方面ヨリ來レリ
其變動ヲ導キタル人物ハシーメンス氏ニアラズ
シテ財界ノ新人物エミル、ラテナウ (Emil Ra-
thenau) ナリ。初メ米國ノ電氣業者ハ距離ノ遠
隔ナルガ爲メニ自己ノ製品ヲ歐洲ヘ輸出スルコ
ト困難ナルヲ以テ單ニ其專賣權ヲ讓渡スコト、
ナシ、ニ依リ佛國ノ一會社ハ歐洲大陸全部ニ對
スル專賣權ノ行使ヲ許サレ、フランス、エヂソン
會社ト稱セシガ一八八三年右ノラテナウ氏ハ獨
逸國內ニ於ケル同一專賣權ヲ同會社ヨリ讓受ケ
テ自ラ獨逸エヂソン會社 (Deutsche Edison-Gese-
llschaft) ヲ起セリ。此會社ノ設立ニ「ミン」ノ銀
行家ノ助力アリ、其資本ハ五百萬「マーク」ナリ
キ。五百萬「マーク」トイヘバ當時會社ノ目論見
タル白熱燈ノ製造ノミニハ資本トシテ巨額ニ過

ギタレドモ本來此會社ノ目的ハ製造ニアラズシテ販賣ニアリ。販賣ニアラズシテ寧ロ新企業ニアリ。會社ハ第一回營業報告ノ中ニ宣言シテ曰ク「吾人ハ發電所ヲ設立スベシ。然レドモ其營業ハ之ヲ別ニ設クル所ノ會社ニ引渡シテ我資本ヲ回收シ更ニ新企業ニ投ズルノ資トナスベシ」ト。是即チ最近ニ於ケル獨逸ノ電氣事業家ノ營業方針ヲ明白ニセル言ナリ。ゾムバルトガ此事

業ヲ以テ近世資本制ノ歴史ニ一新紀元ヲ劃ストイフ所以ノ理由モ亦是ニアリ。而シテ此事業ガ近世企業ノ新形式タル所以ハ其性質工業タルト同時ニ金融業ノ一種タルニアリ。會社ハ各種ノ電氣器械及材料ヲ製造供給スルト同時ニ其器械材料ノ供給ヲ受クル所ノ新事業會社ヲモ組織シテ其株券ノ賣出ニ依テ利益スルナリ。元來新株券ノ募集ニ際シ一應之ヲ引受置キテ賣出利益、(又ハ損失)ヲ取得スル業務ハ之ヲ「エミツシオンスゲシエフテ」(Emissionsgeschäfte)ト稱シ

テ獨逸ニテハ普通大銀行ノ營業科目ノ一ニ屬セリ。今電氣製造會社ガ工業ト共ニ營ム所ノ一種金融業ハ即チ是ナリ。

獨逸エヂソン會社ハ株券賣出ノ創案者ニシテ又此業務ニ依テ巨額ノ利益ヲ得タルモノナリ。會社創立ノ後第一ニ引受ケタル事業ハ伯林ノ電力供給ナリ。會社ハ伯林ノ市街ニ電線ヲ布クコトニ付市役所ノ特許ヲ得タル後「伯林送電會社」(Berliner Elektrizitäts-Werke)ヲ起シテ其特權ヲ讓渡シ、之ニ對シテ三ノ權利ヲ得タリ。第一、送電會社ハ株券發行毎ニ株金ノ半額(百五十萬「マーク」)ヲ獨逸エヂソン會社ニ額面ニテ引受ケシムルコト、第二、前者ノ要スル機械及材料ハ一切後者ヨリ買入ル、コト。第三、前者ノ取締役ニハ後者ノ代表者ヲ加フルコト、是ナリ。伯林送電會社ハ其後度々増資ヲナシ新株ヲ發行シ其度毎ニ本會社ハ額面以上ニテ賣出スベキ株券ヲ額面ニテ引受ケタルガ故ニ之ニ依テ獨逸エ

ヂソン會社ノ得タル利益ハ前後ヲ通ジテ約一千四百萬「マーク」ニ上レリ。而シテ材料供給ニ依テ得タル所ノ利益ハ此外ニ一千五百萬「マーク」アリトイフ。サテエヂソン會社ハ最初ハ自己ノ製造ヲ小規模ニ止メ材料ノ供給販賣ト株券賣出ヲ専ラ營ミ居リシガ數年ニシテ此方針ヲ一變シテ製造ノ方面ヲモ大ニ擴張スルコト、シ終ニハ從來唯一ノ電氣製造會社ナリシシーメンズ、ハルス會社ト對抗スル所ノ大會社トナリ、其名ヲモ一般電氣會社 (Allgemeine Elektrizitäts-Gesellschaft) 若シクハ其頭字ヲ取リテ簡單ニ A.E.G. ト稱シテ獨逸ノ内外ニ其名聲ヲ轟シツ、アリ。一九〇三年ノ資本總額ハ六千萬「マーク」ト稱スレドモ新株賣出ノ際ニ得タル額面超過額二千八百萬「マーク」ヲ積立金トシ之ニ加フルニ三千萬「マーク」許ノ社債アルヲ以テ會社ガ實際運用シツ、アル資本總額一億數千萬「マーク」ニ上レリ。會社ハ伯林ニ於テ世界無比ノ大規模ナ

ル新式工場數ヶ所ヲ經營スレドモ固定資本ハ總株金ノ三分之一ニシテ殘額ノ大部分ハ他會社ノ株券ニ放下セラル。此等ノ株券ハ其實皆一般電氣製造會社ノ製造シタルモノニテ會社新設後形勢ヲ觀テ賣出サントスルモノカ然ラザレバ今後尙其事業ヲ支配シテ自己ノ製品ヲ賣込マントスル所ノモノナリ。前述ノ伯林送電會社及ラインフエルデン電力會社 (瑞西獨逸ノ境ニ於テライン河ノ水力ヲ用ヒ一萬五千馬力ヲ出ス) ノ如キハ永久ニ會社ノ支配ヲ受クルモノナルガ此他ニ創立當時ノミ深キ關係ヲ保ツ所ノ電力會社電車會社ノ數頗ル多シ。一般電氣會社ハ此等ノ設立事務ヲ處理スル爲メニ一般地方及市街鐵道會社ヲ起シ又外國ニ於ケル設立事務ヲ營ム爲メハ瑞西ニ一會社ヲ設ケタリ。此等ノ會社ハ形式上ヨリ見レバ獨立ノ信託會社ナレドモ其資本ノ大部分ハ一般會社ヨリ支出セラレ營業ノ實權ハ一般會社ノ重役ノ掌中ニアルナリ。

余ハ一般電氣會社ニ就テ稍精シキ叙述ヲ試ミタリ。何トナレバ同會社ハ製造ト金融トヲ兼ヌル所ノ新組織ノ創案者且成功者ナレバナリ。然レドモ此新企業法ハ其後獨逸電氣事業ニ通有ノ風トナリタリ。ジーマンス、ハルスケ會社ハジーマンス氏ガ發明家ナル丈ニ其營業モ最初ハ製造方面ノミヲ專トセシガ後ニハ獨逸銀行其他ノ銀行ト共同シテ大ニ新起業ニ關係シタリ。一般電氣會社トジーマンス、ハルスケ會社トハ獨逸ノ電氣製造業者中ノ兩大關ナルガ一九〇〇年頃ニハ此他ニモ資本金一億「マーク」以上ヲ擁スル五個ノ大會社アリテ何レモ同様ノ業務ヲ營ミタリ。五個ノ會社トハ一八七四年ニユルンベルヒニ設立セラレタルシュツケルト會社(Schuckert-Gesellschaft) 米國ノトムソン、ハウストン會社ト關係アル合同電氣會社(Union Elektrizitäts-Gesellschaft) フランクフルトノラマイヤー會社(Lameyer) ケルンノヘリオス會社(Helios) ドレ

ステンノクムマー會社(Kummet)是ナリ。然レドモ此等ノ五會社ハ株券賣出業務ノ失敗ノ爲メニ大損失ヲ來シ多少共不振ノ境遇ニ陥リタリ。抑會社ヲ新設シテ其株券ヲ額面以上ニ賣出スニ依テ利益ヲ得ルハ其成功シタル時ニ大ナル利益ヲ得ベキト共ニ其失敗シタル時ニハ大ナル損失ヲ來スベキコト明カナリ。故ニ英國ニテハ銀行モ此ノ如キ業務ニハ關係スベカラザルモノトスルノ風アリ。英國ニテ此ノ如キ事業ニ關係スルモノハ倫敦ノ富有ナル財政家又ハ所謂信託會社ナリ。獨逸ノ銀行ハ英國ノ銀行ヨリモ投機的ナルガ故ニ此ノ如キ業務ヲモ普通ノ營業科目中ノ一トナセリ。而シテ彼ノ電氣製造會社ハ其專業ノ電氣機械及材料ノ供給ト共ニ此投機事業ヲ營メントスルモノナリ。即チ資本金ニ依テ製品ノ販路ヲ作り、又材料ノ供給、事業ノ經營ニ依テ株券ノ市價ヲ高クセントスルナリ。然レドモ株券ノ市價ハ經濟界ノ景氣ノ如何ニ依テ其高低

容易ニ測ルベカラザルモノアリ。而シテ其高低ノ最モ著シク又最モ急ナルハ恐慌ノ前後ニアルクト勿論ナリ。獨逸ノ電氣事業界ニ此新企業法ノ導カレタルハ一八八〇年代ノ終ナリ。而シテ一八九〇年代ハ如何ナル時代ナルカトイフニ是世界ノ經濟上大ナル波瀾ヲ生ジタル時代ナリ。一八七三年ノ大恐慌以後「ヒタ」押ニ下リタル景氣ハ八八年八九年頃ニ一時活氣ヲ呈セシモ間モナク倫敦ニ於テ一八九〇年ノ恐慌ヲ惹起シ諸物價ハ一八九七年頃ニ至リテ一八七三年以來ノ最低限ニ達セシガ此時ヨリ景氣一變シテ急速ナル向上的傾向ヲ生ジ其極一八九九年ノ秋ニ至リテロシアニ大恐慌ヲ來シ、其翌一九〇〇年ノ冬ニ獨逸ノ恐慌ヲ來セリ。而シテ電氣事業ノ側ヨリ見レバ一八九〇年代ハ恰カモ電車鐵道ノ技術完成セシ時ナリ。此ノ如キ時代ニ於テ彼ノ投機的ナル電氣會社ノ間ニ大ナル浮沈ヲ生ズルハ固ヨリ言フ俟タザルベシ。景氣ノ上進スルニ際シテ

電氣事業ハ非常ナル旺盛ヲ極メタリ。從來馬車鐵道ヲ有セシ市邑ハ爭テ電氣鐵道ヲ布カントセリ。寂寞タル村落又ハ遊覽者ノ多カラザル山ニモ電氣鐵道ヲ布キ電燈ヲ用フルニ至レリ。株券ハ何時モ額面以上幾割ノ高値ニ賣行キタリ。一八九九年伯林ニテ募集サレタル資本額總計ノ十二「プロセント」四七ハ工業ニ向ヒシガ其内六「プロセント」三一ハ實ニ電氣事業ノ領分ニシテ又其内ノ二「プロセント」八七ハ電氣鐵道ニ投ゼラレタルモノナリ。工業ニ投ゼラレタル資本總額ニ比スレバ電氣事業ノ分前ハ三十六「プロセント」ニ當ル。此高ハ獨逸ニ於テ近年非常ニ擴張セラレタリトイフ鐵及石炭業ヨリモ多ク。化學工業ノ數十倍ニ當レリ。然レドモ一旦景氣ノ廻轉スルヤ。製品ハ生産過剩ニ苦シミ、原料貯蓄品ハ下落シ資本ヲ投ジタル事業ハ收益ノ見込ナク、株券ハ下落シテ公債ノ利廻以下トナリ、利ハ騰貴シテ融通便ナラズ。又電氣會社ガ新事

業ヲ起スニ際シ早ク起業費ヲ回收セントシテ株券ノ賣出ヲ急グ場合ニハ株主ニ對シテ配當率ヲ保證スルガ故ニ景氣惡クシテ新事業ノ收益不充分ナル時ハ會社ハ直チニ此保證ノ責任ニ依テ配當率ノ不足ヲ補給セザルベカラズ。此ノ如クニシテ電氣會社ハ其製造品原料品ノ下落特ニ紙上ノ財産ノ下落ニ依テ激烈ナル打撃ヲ受ケタリ。

一九〇〇年ノ恐慌ノ際前掲各電氣會社ガ如何ナル地位ニ在リシカヲ見ルニドレスデンノクムメル電氣會社ハ恐慌時代ノ初期即チ六月中ニ破綻ヲ生ジ、之ト密接ノ關係アリタルドレスデン商工銀行モ同時ニ倒レタリ。而シテ同銀行ト頻繁ナル取引ヲ有セシ所ノ有名ナルライプチツヒ銀行モ亦種々ノ失敗ヲ重テ支拂停止ノ已ムナキニ至リ、從テ此銀行ニ債權ヲ有シタルシユツケルト電氣會社モ亦配當ヲ支拂フコト能ハザルニ至レリ。シユツケルト會社ハ一九〇二年其財産ニ二千二百萬「マーク」ノ減價償却ヲ行ヒ、從

來ノ積立金全部ヲ之ニ充テタリ。ヘリオス會社ハ巨額ノ不健全ナル株券ヲ背負込ミタル爲メ、非常ノ大損失ヲ蒙リ資本額ヲ從來ノ五分一二切下ゲタリ。クムメル會社ハ彌縫ノ途ナクシテ破産シタリ。ラマイヤー會社ハ製品ノ精良ヲ以テ聞ヘタルガ故ニ此方面ノ利益ヲ以テ新起業ノ損失ヲ填メタレドモ尙二百萬「マーク」ノ損失ヲ來シ、一九〇〇年ニハ一割一分ノ配當ヲナシナガラ一九〇二年ハ無配當ヲ宣告シタリ。シーメンズ、ハルスケ會社ハ彼ノ配當率保證ノ爲メニ百萬「マーク」以上ヲ支拂ヒタレドモ會社財政基礎固ク且獨得ノ低壓材料ノ製造ヲナスニ依リテ幸ニ無難ナルヲ得タリ。一般電氣會社ハ他ノ諸會社ニ先テ新起業ニ從事シタレドモ又他ノ諸會社ニ先テ其手ヲ引キタルガ故ニ苦痛ヲ感ズルコト最モ少ク一九〇二年ニモ尙八分ノ配當ヲナシタリキ。

恐慌前ニ於テモ恐慌後ニ於テモ電氣會社合併

ハ當事者ノ議ニ上リタルコト一再ニ止ラズ。然レドモ景氣好キ時ニハ當事者雙方ノ要求スル條件ノ衝突ニ依テ容易ニ満足ナル結末ヲ告グルコトナカリシガ恐慌後ニハ何レモ生産ノ過剩ト營業費ノ多大ナルトニ困ム時ナルヲ以テ合併案ノ成立ハ比較的困難ナラザリキ。電氣會社ノ合併ハ生産高制限ヲ勵行セシムルノミナラズ、製品

販賣ノ爲メニ歐洲各地ニ設クル所ノ支店ノ費用ヲ節約スルガ故ニ競爭會社ノ受クル利益頗ル大ナリ。又伯林ノ大銀行ハ新起業及株券賣出ニ關シテ電氣會社ト共同シ若シクハ電氣會社ニ貸付金ヲナスヲ常トシ、其密接ナル關係ヲ存スル所ノ電氣會社ノ數ハ一會社ニ止ラザルガ故ニ自己ニ關係アル諸會社ノ互ニ競爭スルコトヲ好マザルベク、而シテ一方ニ於テ此等ノ銀行ハ自己ノ重役ヲ電氣會社ノ重役ノ内ニ列セシメテ常ニ其業務ニ容喙スルノ機關トナスガ故ニ銀行ト電氣會社トノ關係親密トナレバナル程銀行ノ壓力ニ

依テ會社ト會社トノ合併ヲ成立セシムルノ機會モ多クナル道理ナリ。今如何ナル程度ニ於テ伯林ノ大銀行ガ此合併ノ成立ニ盡力セシカハ不明ナレドモ其事ノ與テ力アリシコトハ疑フベカラズ。且將來ニ於テモ電氣事業合同ノ傾向ヲ觀察センニハ決シテ銀行ノ勢力ヲ無視スルコト能ハザルナリ。

合併ハ結局左ノ如クニシテ成立セリ。第一團ハ一般電氣會社ト合同電氣會社トノ間ニ作ラレ其條件トシテ合同ハ電車ヲ專門ニシ一般ハ其他ノ總テノ機械及材料ヲ包括スルコト、及兩會社ノ純益ハ共通ノ勘定ニ繰込ミ三ト二トノ割合ニ於テ分配スルコトノ二ヶ條ヲ決定セリ。次ニ第二團ハシューメンスハルスケ會社トシユツケルト會社トノ合同ニシテ形式ニ於テ第一團ヨリモ一步ヲ進メタルモノナリ。即チ此兩會社ハ從前ノ通りニ存續シナガラ別ニ有限會社シューメンスシユツケルト稱スル一會社ヲ兩社ノ出資ニ依テ設

立シ、シーメンズハ低壓材料一切其他二三種ノ品目ヲ除キタル以外ノ物品ノ製造ヲ新會社ニ移シ、シユツケルトハ其所有ニ屬スル總テノ工場ヲ提供スルコト、ナシタリ。但シ兩會社ノ資本ノ一大部分ヲナス所ノ新起業ハ新會社ニ關係ナキモノトス。此ノ如クニシテ一九〇〇年頃ニ七大會社ト稱セシモノ、内四大會社ハ二團體トナリシガ其他ノ三會社中恐慌後ニ於テ勢力ヲ維持スルハラマイヤーノミナレバ局面ハ全然一變シタリトイヒテ可ナリ。而シテ將來此形勢ガ更ニ一變シテ獨逸ノ電氣製造業ヲ一括スル所ノ一大「トラスト」ヲ發展スベキヤ否ヤハ吾人ノ注目ヲ要スル所ナリ。